

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370072

研究課題名(和文) 幸福の宗教学：一地方都市の「福分」と「無事」をめぐる基礎的調査研究

研究課題名(英文) Religious Study on Happiness - Social research in a Japanese local city

研究代表者

關 一敏 (Seki, Kazutoshi)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・名誉教授

研究者番号：50179321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、地方都市をフィールドとして、主として聞き書きから、そこに住む人々の幸福への模索を描き出す試みである。ムラ社会との対比から、そなえの民俗、いいきたり・しきたり・ひととなりの三区分、などの分析をへて、幸福の四象限を仮説的に提示した。そのうち「あいだの幸福」とよぶ第四象限はまだ未熟であるが、宗教者類型のみならず、マチバの民俗的人物像(世話人)を考えるうえでも生産的なみとおしを与えうることを示した(「民俗レベルの利他主義」)。

研究成果の概要(英文)：This study is aimed at an ethnographic research on pursuit of happiness in a Japanese local city Fukuoka. Hypothetical schema of four dimensions of happiness is framed through the analyses of folklore as habitus, of 'iikitari' (oral tradition) & 'shikitari' (practices) & 'hitotonari' (personhood) as triad, compared with rural society. Among the four dimensions of happiness, the fourth type ("happiness in between") deserves our special attention, not only as a type of religious personhood, but also as a typology of accommodating persons ('sewanin') in urban settings (altruism in daily lives).

研究分野：宗教学

キーワード：宗教学 幸福の四象限 マチバ 無事 福分 時間の多層性 ひととなり

1. 研究開始当初の背景

1) 着想の経緯

「しあわせ」と「幸福」をめぐる社会調査の発想は、民俗学者・柳田國男主宰の百項目調査(山村・海村・離島)の最後の問い、「しあわせな人もしくは家」との出会いに遡る(関「しあわせの民俗誌・序説」1993)。九州大学赴任(1998)、福岡市史編纂(2005)をへて、福岡市のマチバをフィールドとしてこの課題にとりくむ着想を得た。

2) 研究動向

内発的な課題であり、ほぼ独力で模索をかさねた経緯があるため、直接的に関連する先行研究としては、ここ10年間の科研調査研究がそれぞれ角度を違えながら、一連のマチバの人生研究を担っている。すなわち

・「日常性の宗教学:一地方都市における幸福の探求をめぐる調査研究(2007&2008年度、基盤C、課題番号19520060、研究分担者:重信幸彦、飯嶋秀治)

・「モニュメントの宗教学:一地方都市における「記憶と歴史」をめぐる基礎的調査研究(2009&2010&2011年度、基盤C、課題番号21520067、研究分担者:飯嶋秀治、連携研究者:重信幸彦)

2. 研究の目的

以下、本研究の目するところを列挙する。

1) 比較的近い目的

- ・「幸福」の理論的研究
- ・「マチバ」の調査研究
- ・地方にある都会の地政学的解明
- ・上記三者の結合

2) 比較的遠い目的

- ・日本語の語彙にもとづく人文学的研究の模索
- ・これまでの自らの諸研究(宗教・呪術・民俗)の総合的地平の確立

3. 研究の方法

ここでは、マチバの聞き書きをめぐる手法の模索の背景にある大きな課題として、民俗とは何か、それはどのように働くのか、について述べる。

1) 「そなえ」としての民俗

民俗とよばれる生活世界のあり方は、たんに固化した民間習俗を意味するのではなく、動きのある一種の生命体である。かつそれがたんなる慣習態ではなく、ひとと人々に指針と希望を与え、一定の方向へと使喚し、ある種の行為をうながす、固化することのない原基状のなにもものかであることは、民俗を考える可能性と難しさを示している。この意義と困難は、ひとり民俗学のみならず、そこから派生し離床しさまざまな近代の制度を生み出してきた苗床として、およそ人間社会を対象とするすべての学問分野に共有される。慣

習と法、生計と経済、常識と学問、習俗と宗教というように。

この手の不定形のなにもものかを対象化する方法として、1)語彙史、2)触媒、3)濾過の三つが考えられる。われわれがもっとも不自由するのはこのうちの1)である。なぜなら明治初期の翻訳状況によって、語源あるいは語根の深意を構築・脱構築・再構築するみちすじは近代の入り口で切断されるから。それでも、対応する欧米語のさらにその先祖へと遡及するみちすじを後追いすることである種の生産的なヒントが生まれることがあり、その例として民俗の近似値としてのフォークウェイズ(W.G.Sumner)とハビトゥス(P.Bourdieu)に注目できる。このうちフォークウェイズはよき習俗(モーレス)の母胎であり、近代の民俗統制と醇風美俗の析出過程(すなわち3.濾過の過程)に応用可能な概念である。またハビトゥスは行為の生産力をもつ原理として考えられており、その意味で民俗とおきかえ可能な概念である。これがモース(M.Mauss)の「身体」やパノフスキー(E.Panofsky)の「建築」に応用されるおもとに、中世神学の用法があったことに注意すると、新しい理解の地平が開かれうる。

原義の用法では、人が聖体を拝領すると、それは人体内に住み着き「習性」(habitus)となる、というように用いる(「注入された習性」「注入された恵み」)。このハビトゥスとアクトゥスを対比した中世神学研究者(清水哲男)は、ハビトゥスを「そなえ」と訳した。すなわち、現にそれをしている(例 いま泳いでいる)という行為の顕在化がアクトゥスであるとすれば、いざとなればできるけれども今はしていない(例 泳ぐことができる)という潜在的な行為への指向をハビトゥス(そなえ)とよぶという。この発想を民俗に援用すると、ふだんは無意識の層にまどろんでいるものの、時と場合と必要に応じて、ひととひと、ひとと行為に方向づけと活力を与える図(「そなえとしての民俗」)を想定することができる。これを「そなえの民俗」あるいはやや意識的に「かまへの民俗」とよぶなら、それは、いわゆる「生活の古典」や「生活の知恵」が都会に生きるための技法として働き動くすがたを記述するところみに結びつく。全体図としては次のように構想できるだろう。(A) 個人人のそなえ(B) 出会いと社交の作り方(C) 集団のそなえ

2) 「いいきたり」「しきたり」「ひととなり」

では、この「そなえの民俗」が動く仕組みはどう考えればよいのか。これまで民俗世界は族制(社会組織、家族制度)や職制(仕事の分類)、口頭伝承(昔話、伝説、世間話)や俗信(心意)等々の諸分野に分類されて調査されてきた。しかしそうした各分野を横断する着眼点についてはどうか。これについては、「イイきたり」と「シきたり」に二分した民俗学者(小嶋博巳)にならぬ、このコトバと行為(ふるまい)の二分法をまず採用する。柳田國男三分類ならば、言語伝承と有形伝承になり、これに不可視の第三部として「心意」もしくは「俗信」が入る。しかし、その手前にあるだろう項としてもうひとつ「ヒトナリ」(人

物像)を立てることを提案したい。イイキタリとシキタリという、多少とも人を離れた(という意味で社会的・集合的な)民俗がかりに無意識層に「そなえ」として働きかけるとするなら、このそなえが現実化・顕在化するのにはヒトトナリを媒介とするほかない。なんらかの動力と形態をもつ傾向性のようなものがわたしたちの生活の深層にはあり(そなえの民俗、ハピトゥス)、それが実現するときにこれをとりまく社会相と時代相によって多様なあらわれかたをする。このプロセスはひとりひとりの意図や能力をはるかにこえる次元にあるけれども、同時にそのひとりひとりの「ヒトトナリ」との往還が実現態を生むという仕組み。この仕組みによってまた、あらたな人格と次世代の人物が育てられるという循環が見られる。ヒトトナリはここにいう人格や人物像のイメージをふくみ、あらかじめ社会性をそなえた語彙(英語で云うパーソン)として用いる。民俗における個人の役割、という大切な難しい課題がそこから見えてくる。

そうしてその入り口は、ふつうライフ・ヒストリーとよばれている素朴な人生の聞き書き以外にはない。ライフは人生と生活と生命。ヒストリーは歴史と物語。なので学術語としては人生史と訳されるこのコトバは、人生誌、生活史、生活誌、さらには人生の物語とも云いかえられる。ここで問題は、人物・人格を焦点化することがたんなるライフ・ヒストリーに終わるのか、にある。本プロジェクトでも、これは人生史なのか、それとも「生きる技法」の析出であるのかという問いが再三問われてきた(重信幸彦)。生きる技法とは、日常のことばのやりとりやふるまい方にあらかじめ軌轍を回避し、暮らしを「無事」なものにする知恵と工夫がみられること、また仕事のうえでの手わざと身のこなしの成熟と伝承といった文字通りの技法の項を含みこむ表現である。

いまの暫定的な結論は次である。民俗の領域では、そなえ(いいきたり・しきたり)にこめられた、それ自体は集合的かつ歴史的な生活の知恵を、当の人物(ひととなり)から切離することが困難である。この消息はまだ手つかずの、これまでも並行して進めてきた呪術研究の領域と照らして進めることにする。すなわち、呪術・宗教・科学という、より限定した主題のなかで、それぞれの人物像(呪者・宗教者・科学者)と技法との離床度を測深しつつ、モースにはじまるパーソンの民族誌の系譜(M. Leenhardt, C. Geertzら)とともに考えること。すなわち「呪術と日常」の主題群と同系列の課題として文脈化したい。

3) 記述ということ

マチバの民俗誌を作ろうとすると、おわりのない記述、きりのない附註作業という事態が生ずる。なぜ記述なのか。社会科学的な端的な定義というやり方でなく、いつはてるとも知れない民族誌・民俗誌記述という方法をとる理由は何か。これについては、定義の学問と記述の学問という古典的な(新カント派的な)分類をふまえて、記述の必然性の議論をすすめてきた。すなわち宗教学にもどると「他者の信仰」を記述する視角として、定

義(信仰とは何か)ではなく、記述(信仰しているとはどのような状態を云うのか)に問いを変換することで、かれらとわれらの二分法的不自由さを抜ける試みである。

4. 研究の成果

1) しあわせ - 幸福の二類型

幸福という言葉は、宗教や社会と同様に、幕末維新の時代に欧米語から訳された翻訳語である。その happiness の訳語を「幸福」にすることに西周と福沢諭吉はある種のためらいを感じていたらしい(山田洗)。彼らは、幸福を「求めて得られるべき福祉」とあえて形容句つきで定義した上で「たまさか訪れる僥倖」と区別しようとした。前者がハピネスの条件付き訳語とすると、後者には「しあわせ」「さいわい」「さち」の語感がある。既に現在の我々の用法では、両者を区別する意識が薄れてしまっているが、元々「しあわせ」には「よい・悪い」が伴っていた。「しあわせのよい人、または家の話を承りたい」という山村調査の質問項目の百項目目の問い(柳田國男)はその一例である。ここに見られるように、しあわせ・さち・さいわいには外から訪れるめぐりあわせの良さの語感があり、待ち受けるための準備に怠りはないものの、自らの勤勉と努力の成果としての幸福感とは異なっている。たとえば、女兒のえくぼに愛嬌がよく人に認められるのをひそかに待ち受けるしあわせ感など(柳田)こうして、努力して得られるアチーブメント型の幸福(ハピネス)とめぐりあわせのよさを期待する待ち受け型の幸せとの対比が可能である。後者を敷衍すれば、はっきりとした言葉を伴わずにもと振る舞いに託してかける願もこれに含まれよう。良縁・子宝・合格祈願から治病・厄払い・縁切りのお百度に至るまで。また、より日常的な場面では、水商売を含めて客を待ち受ける商いの仕方もこの型である。ものを売る商店もまた、客の必要性に応える品ぞろえを持って準備している。

2) 隣人とあいだ - 幸福の四象限

1) で述べた、能動と受動のいずれにおいても希薄であるのは、「他者」の項目である。タイセン、岩田靖男らは、「人間の自律モデル」(ギリシャ思想)に加えて、「隣人の幸福モデル」(ユダヤ・キリスト教)に注目している。この場合、前者は近代アチーブメント型の幸福の源流であるから、これを合わせると幸福の類型は三つになる。以上の「能動・受動」と「自己・他者」を掛け合わせて出来る四象限にこれらを配分してみる。【次ページの図参照】

空白のまま残る第四象限を一旦棚に上げると、能動にあたるにはタイセン・岩田におけるモデル的命名が可能だが、受動の(待ち受け型)にはモデル的命名は出来にくい。むしろ、これにあたる人間類型を挙げたほうが説得的である。すなわち、民話に登場するものぐさ太郎、三年寝太郎といった主人公たちがこれに当たる。家の盛衰を左右する座敷童の話は、遠野物語にみられるようにめぐりあわせの良さを神格化したものである。

ものぐさ太郎や三年寝太郎といった怠け者たち（愚か者たち、たくらた）について、神に愛でられし者たちは小さき者たちであり普通よりも劣った者たちであるとして、そこに日本の固有信仰（幸福の条件）を読み込んでいる。しかしこれは、角度を変えればむしろ上手に待ち受ける者たちが幸福の条件になるケースであるだろう。

第四項目目の受動かつ他者の第四象限に残る空白についてもまた、と同じようにモデル的命名は困難であり、人間類型を挙げることにする。民話的類型であれば、吉四六のとんち話など笑いを引き起こす昔話がこれにあたる。また、ここには炭坑の痴れものであるスカブラ（上野英信）を入れてみたい。自分一人ではなく、他者だけのためでもなく、あいだの幸福（鈴木大拙のいう菩薩の「社会性」）を求める意味では、「他者・自己」であり、自覚的でも主体的でもない点では「受動」である。なぜ自覚的ではなく、ましてや自己言及性にも欠けるかといえば、このとの受動的な営みが民俗＝ハビトゥスの次元で展開することにかかわるからである。この顕在化しない行為未満の性能である「そなえの民俗」は、近代（西洋）アチーブメント型の幸福論の視野には回収されえない微妙な役立ち方をしている。

図

	能動	受動
自己	アチーブメント型 Happiness原義 求めて得られる 幸福	待ち受け型 しあわせ原義 さち、さいわい (よきめぐりあわせ)
	人間の自律モデル ヘレニズム [タイセン、岩田]	固有信仰 [柳田] ものぐさ太郎、三年寝太郎、ザシキワラシ
他者	隣人愛、慈善 caritas, charity	あいだの幸福 菩薩、スカブラ、 吉四六、デクノ坊
	他者（隣人）の幸福モデル ヘブライズム [タイセン、岩田]	自己＝他者の幸福モデル トホホ主義、ためらいの倫理学 [内田樹] Waldron, Camusなど

3) 宗教者の四象限

以上の四つの象限を宗教的類型へと読み替えるとうなるだろうか。人間類型の比較にまで熟していない段階だが、いくつかの論点をあげてみる。

菩薩と「よき隣人」としての聖者

妙好人と「受け身のさしひかえ」(Waldron)

あいだの幸福には、菩薩、スカブラ、木偶の坊が含まれる。これが、自己＝他者の幸福モデルとして「あいだ」をつなぐ存在であるのは、の能動にかぎりなく近接する菩薩像（浄土教の阿弥陀仏）から、進んで人を扶助するとは見えない人物像（スカブラ、吉四六、デクノ坊）までを含みこむ領域だからである。ここには「とほほ主義」や「ためらいの倫理学」（内田樹）をも含める。

思いやりと同苦

感情語ではなく態度と構えの言葉として考えるなら、たんなる同情ではなく、立場を同じくするという用法である。すなわち compassion（同苦）あるいは suffering community（同苦共同体）であり、その深い意味は、同じ苦しみを抱える集団ではなく、同じ苦を抱える（同じ苦の）自覚を持つが故に作りうる共同体のことである。

そもそも幸福の問いは、柳田の調査項目に始まり、利他（自利・利他）の道をそれだけしかありえないかのように歩む菩薩の思想に関わるものである。人の、またはあいだの幸福に献身するこの人間像には、単なる善意や共感、あるいは狭い意味での同情でなく（これには独善と摩耗の恐れがある）、そうなることが元から決まっていた必然であるかのように自ずと人を救う（救ってしまうという本願の働きの）ベクトルが備わっている。宮沢賢治は、全体の幸福なしに個の幸福はありえないと主張している。その「雨ニモマケズ」に描かれたデクノ坊の原型は法華經の常不軽菩薩に比定される。会う人ごとにあなたは仏になるといって礼拝し、周りから気味悪がられて石を投げられたりするこの奇妙な菩薩像の民俗版、あるいは日常版としてスカブラや吉四六型の人物像を考えると可能である。翻って、この線上で菩薩とはいったいどのような人物であるのか、との問いが生まれる（古くて新しい問い）。

代受苦の思想

この考え方は『維摩経』の維摩詰（ヴィマラキールティ）の病の段にある。不思議なことにあらかじめひとを救うことによって自らが救われるシナリオは、民俗次元の病治しに顕著に出ている。ユタをはじめとする民間医療者の例がそれで、ここでは、カミダリー（巫病）を癒すためには他の人々を救う位置（すなわちユタ）になるほかないとされる。この場合、巫病と呼ばれるのは、当人がユタになった時に事後的にさかのぼってそう名づけられるのである。ユタになることをためらう多くの病者たちは、ユタ未満の存在として人を助けもしないが、同時に自らも救われない境遇に身を置くことになる。民俗次元のこの仕組みは、人の救いを本願とする菩薩の境涯を理解する上で何らかのヒントを与えてくれるだろう。すなわち、菩薩もまた人を救うことがそのまま自らの救い（成仏）であるような場所に身を置くのである。

4) マチバの幸福論

福岡市をフィールドとしていくつかの事例を閲覧してみたい。

幸福と時間

焦点は、四象限のうちのとである。「待ち受けることはその期に備える（待機する）」ことである。これによって自ずと普段の日常的な、また資本の加速的な時間とは異なる時間の流れを作る結果になる。すなわち、そうした時間とは異なった時間のスケールが自ずとつくられるのである。商売の場合、との差異になお課題が残るが、いくつかの事例をあげておく。「部品の問い合わせがあって、『あー、あってよかったあ』なんて言われると、ほんとに嬉しいです。時計ってというのは、一つ部品がないだけでも、動きませんからね」（時計部品卸）。「何が出るのかわからないのが金物屋。だからとりあえず、量は要らないけれども、たくさん種類を置いている」、「在庫を切らさないことが肝心」（金物屋）。「水商売だからこそ店もまたお客さんを選んでいのではないですか」、「宣伝はしない。モットーは『あまり手厚くないサービスを』（パー）。これらについては、**待ちのグラデーションあるいは濃度**を考える必要があるかもしれない。どんな意味でも呼びこまないという、**待つ極限（またない）**をもこれに含めたい。

「地域文化とか食文化とかを創る役目を和菓子屋が果たしてもいいんじゃないか」、「百年後の評価のときに『あの人たちがいたんだ』と言ってもらえると、心地いいやないですか。そりゃいいって皆が賛成した」（和菓子づくり）。この場合、和菓子づくりは生活の糧であるだけでなく、地域に根付いた食文化を創るという魅力を職人に呼び覚まし、なによりも共同事業の成果を評価する基準を百年後に持ちこむという発想が功を奏した例である。その結果、いつの間にか、足の引っ張り合いをする商売がたきではなくなったという。すなわち、**時のスケールを変える知恵**である。

時間とのつきあい方には、もうひとつある。「『ああ、私に順番が来たっちゃう』って思うて。叔母もして、陶器店の奥さんももうできなくなれて。町内の人が出たほうがいいもんね、掃除は」（飢人地蔵守）。「私たちは中継点みたいなもんですからね」（猿田彦神社世話人）「大切なのは渡し続けること」（東油山海神社元総代）いずれも寺社の守役であることには理由がある。年中行事に代表される大きな時間の流れと年々歳々のくりかえしのなかに人生の時間を定める、ことである。**より大きな時間のなかで、限られた（しかし大切な）自分の役割を知ること、いいかえれば番のフォクロアである。**ここには朋友・ツレといった平等主義的なヨコのつながりと、時系列上のタテのつらなりが含まれており、「見まもる」視線を共有する「番」（風呂番[番台]、消防団[火の番]）をする人たちとともに考えたい。

さらにまた小祠・大社寺を問わず、**願をかける**行為も「待ち受ける」ことである。太宰府天満宮、水鏡天神、綱敷天神での合格祈願や、櫛田神社、筥崎宮、香椎宮、愛宕神社での初詣には無病息災・商売繁盛等々の（+）への期待がこめられており、猿田彦神社庚申祭の猿面（魔除け、盗難除け）や

若八幡の厄祓いには、（-）状況の予防が願われている。野芥の縁切り地蔵は男女の悪縁と病気からの縁切りに力ありとされ、（-）の現状からの回復と修復が目される。

あいだの幸福論

象限の「あいだの幸福」について事例を挙げてみよう。菩薩ならば、他者＝自己の幸福というベクトル（自利利他）になるものが、その日常版ではどのようにあらわれるのか。そこには**笑いや和み**にかかわる道徳的な面と、たよりにされる**信頼の仕組み**が共存している。ひとことで言えば**世話焼き**であり、山村百項目調査にある「褒められる若者やひと」にかかわる。「最初はもう『あなたバカやねえ』って言われて。貸せばこごうくらいでも結構な家賃収入にはなるんですよ。『バカが一人くらいおってもよかるうもん』で強がって。私が反対に喜んぶるから、友人は『あんたは天然記念物やね』って」、「うちは高校生までと八十歳以上、それから街にカルチャーショックを起こすような、街の活性化につながるようなことをやる人、そして私が芸術家と認める人は無料です」（エンジョイスペース大名主人）。「志賀島で生まれて、志賀島で育って、志賀島で就職して、ほとんど志賀から離れてなかるうが。そやけん、つながりうとはいっぱいあるたいね、みんなと」。「地元で二十四時間おるけえね。やっぱ世話焼き。志賀じゅう家の中のことまで知とうやないかな。俺が気安う何でもするけん、やっぱ頼みよか。しとつても忘れとるような性格やけ、恩着せたとあることもせえんし」。「病気から何から、すぐ市場に走って来なる」（志賀島の元漁協せり人）。本業のせりの仕事・値を付けることも漁師と買い手と双方の感覚をつかむ必要がある、「いろいろ言われんごとせらないかんのが難しい」。

これらの人物像は、ひと昔前にごくあたりまえにいた「世話焼き」の姿である。この「世話焼き」のあり方とその動機付けを考えると、その場所（このマチに、この地元）の誇りと愛着というべきものがある。自分のはたらく葬祭場を「日本一」と述べる視線や、「よい博物館をつくるには…」を語る視角には、九州の福岡の、さらには今ここにいる場所を離れずに、それをいかに良いものに仕上げつづけるか、という意味での「充足と利他」の志が読みとれよう。この場合、郷土愛に代表される自分の居場所へのこだわりがある。うまれそだった場所（**ここ**）のしあわせな記憶を保持し、さらにその場所をよりよくしようという動機付けである。よってそれは他者一般の幸福ではなく、**ここにいる他者（＝自己をふくむ）の幸福**というベクトルをもつ。これを「**民俗レベルの利他主義**」とよぶならば、同じ地域の民俗ゆえに利他はすなわち自利になるだろう（象限と象限）。その限定性こそが当事者にリアルな「あいだの幸福」をもたらすとすると、これは起伏と濃淡のある「隣人愛」であり、のっぺらした、リアリティのないそれではない。

ここで問われるべきは、次の問いである。**とはこうした「民俗レベルの利他主義」（と）から離床して普遍化しようという動きであるのか。**そのさい、普遍化しつつもリアルでありつづける

条件は何か。はたしてオキシデントの歴史が物語るように、リアルな charity への道には、宗教理念の支えが必要なのだろうか？「受け身のさしひかえ」(Waldron)や「ためらいの倫理学」(内田樹)にある「不行為」にもとづく「あいだの幸福」を視野に収めつつ、考えて行きたい。

地方都市ということ

最後に「一地方都市」のマチバの特徴にふれておく。地方都市からみた、いわゆる「都市と農村」あるいは「マチバとイナカ」の対比は、次のようなものである。

- ・イナカ: 帰属集団と準拠集団の一致した状態。
- ・マチバ: 準拠集団がつねに外部にある状態。

外部とはこの場合、京都や東京という「より大きなミヤコ」をさす。すなわち、憧れのドライブがソトへと強くはたらく状況である。そこには、たえざる拡大と変貌の力学がみられよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

関一敏「『福の民』の方法覚書」『文化人類学研究』16号、5-10、2015年、査読無

関一敏「宗教的発問とその構えについての覚書」『西日本宗教研究誌』2号、43-82、2014年、査読有

〔学会発表〕(計 10 件)

— 関一敏「宗教を定義することと記述すること」西日本宗教学会、2016年3月27日、九州大学箱崎キャンパス(福岡県福岡市)

— 関一敏「宗教とは何か」福岡ユネスコ文化協会、2015年12月12日、福岡天神ビル(福岡県福岡市)[招待講演]

— 関一敏「呪術と日常」日本宗教学会、2015年9月6日、創価大学八王子キャンパス(東京都八王子市)

— 関一敏「九州で学問すること」九州大学宗教学研究室記念シンポジウム、2015年3月28日、九州大学箱崎キャンパス(福岡県福岡市)

— 関一敏「福の民-しあわせの民俗誌に向けて」早稲田人類学会、2015年1月30日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)[招待講演]

— 関一敏「古くて新しい問いをいかに問うか」日本宗教学会、2014年9月14日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

— 関一敏「福の民-しあわせの民俗誌に向けて」京都人類学会、2014年4月18日、京都大学百周年時計記念館(京都府京都市)[招待講演]

— 関一敏「『無事』の民俗-福岡市をフィー

ルドにして」日本民俗学会、2013年10月13日、新潟大学五十嵐キャンパス(新潟県新潟市)

— 関一敏「幸福論-福岡市のマチバをフィールドとして」日本文化人類学会、2013年6月9日、慶応大学三田キャンパス(東京都港区)

〔図書〕(計 1 件)

関一敏・重信幸彦・山室敦嗣編『新修 福岡市史 民俗編2 ひとと人々』2015年、1050頁、福岡市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関一敏(SEKI KAZUTOSHI)

九州大学・人間環境学研究院・名誉教授

研究者番号: 50179321

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし